21歳からの出発～ルビコン川を渡る新島襄～

講演	本井　康博〔もとい・やすひろ〕
講師紹介	元同志社大学神学部教授

風間浦村

先々週、風間浦に行ってまいりました。ここ京田辺市はもとより、京都市でも風間浦を知ってる市民は、おそらく暁天の星みたいに希少でしょうね。

同村は青森県の下北半島先端に位置していて、「本州最北端の村」を売りにしています。ちなみに、下北半島で全国的に知られている観光スポットは、大間市、恐山、そして下風呂温泉の三か所です。大間はまぐろ、恐山は「いたこ」と呼ばれる巫女による口寄せで知られています。私の親戚も先月、亡くなった夫の声（霊）を呼び出してもらうために行ってきたばかりです。そして、三番目の名所、下風呂温泉があるのが風間浦です。「本州最北端の温泉」ですから、温泉マニアにはよく知られています。

同志社はまぐろや巫女とは無縁です。ですが、下風呂温泉とは大いに関係があります。新島襄が日本を抜け出すために江戸から函館に行く途中に、ここで、ひと風呂浴びたからです。だから、風間浦村には今年も同志社から、八田英二総長・理事長を始め十名を超えるスタッフが三泊四日の日程で繰り出しました。

新島襄、寄港の地

新島襄が快風丸という船で品川から函館へ赴いたことは、比較的よく知られていますよね。彼はその航海途中に、風間浦の温泉に二度、入浴しました。最初から入ろうと決めていたのでも、ぜひ入りたいと熱望したから、というわけでもありません。

快風丸が想定外というか、やむを得ずに風間浦に停泊したからです。潮の流れや風向きが不味くて、船は津軽海峡を渡れずに二日間、足止めを食らいました。その間に、二日続けて上陸して、温泉に二度入ったというわけですから、まったく怪我の功名です。

そうしたご縁から一九九二年に、遠くに北海道を臨む当地の「いさり火公園」に「新島襄寄港の地」碑（以下、寄港碑）が建てられました。

それが契機となって、以来三十年間にわたって同村と同志社との間で、さまざまな交流が展開されてきました。とりわけ今年は碑が建立されてから三十年の節目となる年ですから、例年の碑前集会のほかに、特別の記念イベントが開催されました。それが卒業生によるコンサート、ならびに私の講演です。

風中と同中の交流

これまでの交流を振り返りますと、風間浦中学校（以下、風中）と同志社中学校（以下、同中）との間で繰り広げられた生徒同士の交流が、本流です。特に風中は毎年、二年生が「同志社体験入学」と銘打って、京都に来ます。というわけで、同志社の学内において風間浦を知っているのは、同中の出身者ですね。

今年の体験入学は先月末のことで、おりしも私が風間浦に行く直前でした。大学の今出川キャンパス正門の所で一行を出迎えました。二年生全員といっても九名でした。

複数の教員が引率したうえに、校長、教育長、それに村長が同行されているのにびっくりしました。聞けば、生徒の費用負担はゼロで、経費の全額を村が支弁するという力の入れようです。

一方の同中は、二年生全員、約三百名が揃って下北半島に行くというわけにはまいりませんから、生徒会の役員が定期的に訪問しております。

両校のこうした交流の結果、うれしい成果がいくつも生まれています。毎年、両校が交換する記念品もすばらしいです。私が好きなのは風中生が作った木工品で、先月、同中の「風間浦ルーム」に行って、写真を撮ってきました。

私的に一番、うれしいのは風中の卒業生が同志社に入学していることです。まずは、一九九四年に女子の卒業生が初めて同志社女子大学（英文科）に入学しました。

そしてついに今年の春、同志社大学理工学部（このキャンパスです）に男子の卒業生がひとり入学しました。村始まって以来、初の同大生です。

ちなみに今年の本学一般入試では、青森県全体では六名が合格しましたが、そのうちのひとりが風中卒業生、というわけです。彼は中二で同志社に体験入学した時に同志社大学を実際に見学して、「ぜひこの大学に来たい」と強く願ったそうです。

風間浦の独自性

さて、新島が温泉に浸かったというご縁だけで、それも計画的じゃなくて思いっきり想定外の出来事のおかげで、いろいろな交流が毎年、展開されるのは、まさに奇縁です。そのことは、新島が寄港した港は他にも沢山あるにもかかわらず、寄港碑があるのはここだけ、という事実を知ると、なおさらです。

私の風間浦訪問は今回で三回目ですが、来るたびに思うのは、新島にとってこの地は独自の重みを持つスポットなのだということです。海峡の向こうには北海道の山並みが目に入ります。函館から密出国を企てるという悲壮なゴールを目前にして、足止めを食らった新島は「ここに来ていったい何を思っただろうか」と、考えさせられます。

その際、津軽海峡をルビコン川に見立てると、彼にとって風間浦は精神的に実に大事な意味を持つように思います。このルビコン川の両岸、すなわち風間浦と函館の両方に新島の記念碑が建てられているだけになおさらです。

新島は約47年の生涯でさまざまな港に寄港しています。元々、船が好きだったこともあり、二度にわたった世界一周を含めると、寄港地の数は相当な数に及ぶはずです。

ですが、現場に寄港記念碑が立つのは、風間浦だけです。そのうえ、出入りした港にコラボしたように、彼岸と此岸の双方に碑があるのは、世界で唯一、津軽海峡だけです。

ルビコン川を渡るシーザー

というわけで、津軽海峡は新島の生涯にとって隠された重要な意味があると思われてなりません。そこで、シーザーの故事になぞらえて、海峡をルビコン川に例えてみます。シーザーは、渡河すれば死罪、と元老院令が定めているにもかかわらず、軍を率いて川を渡りました。

越えてはいけない川を越えたのです。そのとき、彼は「賽は投げられた」と叫んだと伝えられています。サイコロを投げるというのは、要するにバクチです。イチかバチかの大勝負に賭けたギャンブルです。どちらに転ぶか分からないサイコロの目に自分の運命を賭けたのが、ルビコン川を渡る時のシーザーです。

「賽を投げた」新島襄

新島もまた、津軽海峡を渡ることに自分の未来を賭けました。おみくじで言えば、吉と出るか凶と出るかの境目におりました。

それまで来たこともなかった本州の北端に至って、彼は密出国する覚悟を改めて問われたのではないでしょうか。彼には本州の出口は、嫌悪した旧世界の「出口」であり、とりもなおさず希望に満ちた新世界への「入口」でした。

そこを突破するのは、犯罪です。自分だけでなく、一族に累が及ぶ危険な行為です。引き返すなら今です。函館に至れば、ただ前進あるのみで、後は密航するしか選択肢はありません。それを承知で彼は不退転の決意をこめて、思い切ってサイコロを振りました。サイコロの目は、結果的には吉、それも大吉でした。

新島21歳５か月のこの時が、彼の後の人生の本格的な出発点になります。それまでの江戸における20年余りの生活は、サムライの子として抑圧的な生活を強いられました。そうした封建社会のしがらみを振り切り、自分の意思と意図に基づいて新たに組み立てた人生を選び取ろう、と決断するに至ります。

この希望と自由を求める旅立ちを、今日は出発あるいは再出発と言い換えてみます。

人生の分水嶺

さらに言えば、この時が新島の人生にとって分水嶺、あるいは分岐点に相当します。一般的には、新島の47年近い生涯は、三分割されます。第一ステージ（一八四三年～一八六四年）、第二ステージ（一八六四年～一八七四年）、そして第三ステージ（一八七四年～一八九〇年）です。

それぞれ生活の拠点が、江戸、海外（欧米）、国内（京都）と違っているのに応じて、身分や名前も違っています。ですが、名前からしても第二と第三ステージは繋がっています。それに対して、第一と第二ステージは、明らかに断絶しています。新島七五三太（しめた）としての歩みは函館で終わったのも同然で、上海で自分を拾ってくれたアメリカ人船長が命名した“Joe”（帰国後は襄）とはおよそ別人格と見なしたほうが、分かりやすいです。

要するに風間浦から函館に至る新島は、七五三太の「出口」、すなわち新島Joe（襄）へと至る「入口」に立っていたことになります。

助走としての玉島航海

新島が意識的に自分の人生を設計し、そのためにルビコン川の渡河を決心するに至るには、実は前哨戦とでも言うべき助走があったことを見落としてはなりません。玉島航海です。函館への航海（函館航海）は、玉島航海抜きには説明がつきません。

新島が所属した上州安中藩の本家筋に当たる藩は、備中松山藩（現在の岡山県高梁市）です。藩政改革の一環として洋式貿易船を購入した同藩は、試運転を兼ねて藩の飛び地（瀬戸内の玉島港。現在の倉敷市）まで江戸から航海することにいたしました。その際、航海術を学んで船舶操縦のスキルを有していた新島が呼ばれます。

この時に乗船した船が快風丸です。後に新島を函館に運んでくれた船との運命的な出会いです。出会いはさらに思いがけない確信を生みます。２か月にわたる船上生活が彼を「家出」（脱国）へと誘うことになりますから。要するに、新島にとって玉島航海は、密出国への助走となるのです。

「丸い空」を求めて

彼は窮屈な藩邸から一時離れて海に出ることで、初めて自由な生活を満喫できました。自由への憧れ、すなわち「家出」願望が強まったのです。それまで彼が神田の安中藩邸内で送った生活は、「天は小さな四角形」（『新島襄全集』10　同朋舎出版　36頁。以下、⑩三六）という閉じ込められた窮屈な生活でした。藩邸が「正確に正方形の囲い地」あるいは「方形の囲い地」（⑩二一、五二）であったように、空も四角形でした。

そこに住む者は「籠の鳥」、「袋のネズミ」（⑩一四）のような不自由な生活を強いられました。ところが、海上に出て見ると、空は無限であることが分かりました。

予想外の発見です。「四角に区切られた空」じゃなくて、いわば「丸い空」に感銘を受けました。だから自身でも、玉島航海は、「非常な喜び」をもたらしてくれたと証言しております（⑩三六）。

「危ない冒険」に乗り出す

玉島航海から江戸に戻った翌年（一八六四年）、航海を共にした旧友から、快風丸が「三日以内に」（⑩一六、三九）函館～実際はサガレン（サハリン、⑤二三）～に行くことを知らされます。それを聞いた新島には、函館から「外国への逃亡」を図る絶好の機会になるという発想が「稲妻のよう」に閃きます。（⑩三九）。

こうして新島は即座に「危ない冒険」（⑩六三）やら「新しい冒険のために命を懸ける」ことに乗り出す決心をします（⑩四五）。成功する見通しや確信はもちろんありません。それだけに「無際限の大洋に巣出す」のは、「並たいていのことではなかった」という不安を覚えた、と吐露しています（⑩四四～四五）。

しかし、函館へ出発する直前、神田の実家（安中藩邸内）で家族と送別の時を分かち合った際、長期にわたる別離を悲しんで涙を流した家族に対し、新島は笑顔で別れを告げました。

その時の気分は「籠の束縛」から解放された「爽やかな大空に舞い上がった鳥」のようであった、といいます（⑥七六　原文は英文）。

新島襄のカレッジ生活

今日は同志社スピリット・ウィーク中の講演ですから、以上のことを大学生目線で改めてまとめ直してみます。

新島が風間浦村でルビコン川を渡ったのは、21歳でした。21と言えば、今なら大学三年生前後の年代です。今日の演題を「21歳からの出発」とした理由です。

当時の新島と同世代の大学生の皆さんには、新島が人生の目標設定を定め、その目標に向かう旅立ちの一歩を踏み出した当座の気持ちと決意が、多少とも分かってもらえるのじゃないでしょうか。

実は「二十一歳の旅立ち」というタイトルで私は以前、同じ話をしたことがあります。同志社函館キャンプの準備会（二〇〇六年六月八日）でキャンプ参加者に向かって、です。サブタイトルを「七五三太、函館から出奔」としたように、視点は函館でした（講演内容は拙著『錨をあげて～新島襄を語る（三）～』一七頁以下に収録、思文閣出版、二〇〇七年）。

今日は、新たに風間浦に軸足を置いて新島の国外脱出劇を分析し直してみます。同時に、合わせて気づいてほしいのは、それ以前の体験です。ルビコン川を渡る３年ほど前の19歳から20歳にかけて体験した玉島航海です。国外脱出の萌芽は、そこですでに芽吹いています。

江戸や陸の生活では気づかなかったことが、船上生活で発見できたからです。短期間とはいえ、船で暮らしてみた結果、「私の精神的な視野がうんと広がった」と感激しています（⑩三六）。大人への脱皮ですね。

今の大学生に当てはめれば、新島の場合、２年生から３年生にかけて、将来の目標が明確になり始めたと言えるでしょうね。21歳で新しい人生を求めて未知の世界へ飛び出す背景には、こうした「助走」とでも呼びたい経緯があったのです。

就活よりも進学問題

こうして彼は、今風に言えば大学３年生の時に、「これまで何一つ困難を経験したことのなかった」自分が、「新しい生活を始める」ために、また「消しがたい欲求を満足させる」ために、「何物かを求めて、ほとんど無際限の大洋に乗出す」ことを決断します。しかし、それは「並たいていのことではなかった」と後に回想しております（⑩四四～四五）。

今の３年生なら、ちょうど就活に追われる時期ですが、新島の場合はやっと学活というか進学を考える時期を迎えたことになります。21歳で函館を出た新島は、１年と２日をかけてボストンに辿り着きます。その後、ホストファミリー（ハーディー家）と巡り合って、同家の庇護を受けて念願の学校（まずはハイスクールです）に入学できたのは、ボストン入港後、百日を経てからのことです。

その間、ボストン港に停泊する船中で朗報が届くのを３か月以上も待たされた新島の心中は、いかばかりであったかを推測するべきです。後見人が見つからなければ、日本に送り返される懸念もあったはずです。

この間、彼は「まるで気がふれた人」のようであった、と告白しているのも、さもありなんです（⑩一七）。それだけに、「アメリカの父」Ａ・ハーディーから家族同様に受け入れてもらえた時の喜びは、言語に絶するほどだったでしょうね。こうして新島は念願の留学生（まずは高校生）になれました。

品川を出港した日から数えると、高校入学までおよそ１年半かかっています。ついで大学生になるのは24歳、そして大学院に入学したのは実に27歳の時でした。

学業をすべて修了したのが31歳ですから、今風に言えば立派にオーバードクターです。だから彼の就活は31歳になってからです。

この時も新島は「アメリカの父」のおかげで、ハーディーがいわば理事長をしているボストンのミッションから宣教師に指名（採用）されて、日本伝道をするために故国へ送り返されます。

こうして帰国後の新島の生活は、ボストンからの給与で定年まで安泰です。就活をほとんどしないで、安定したポストに就けたわけですから、ここでもラッキーですね。

ルビコンを突破する勇気

年齢から見る限り、現役大学生の皆さんは、新島のこうした人生よりも数年早くそれぞれの人生を歩んでおられることになります。しかし、遅かれ早かれどこかの時点でルビコン川を渡る局面が生じて来ることがあるのでは、と思います。

問題はその際の対処法です。ルビコンを突破する原動力がなければ、人は難局の前でたじろぎ、おじけづき、ついにはUターンを余儀なくされます。新島の場合は、やはり止むに止まれぬ衝動や意思、夢、志、あるいは使命感といったものに突き動かされたのでしょうね。

さらに、彼が生まれ育った社会が、いまだ封建社会だった、ということも忘れないでください。たとえ正しくとも、理想的な生活を追い求めることなど許されない時代です。それだけに、新島のケースなどは敢えて危険を冒してチャレンジした実に稀なケースです。

密出国に失敗すれば、処罰は自分だけで終わりません。家族全員に累を及ぼすことになります。たとえ成功しても、そうです。新島家の長男として父親の後を継ぐことを自ら放棄する行為ですから、家族に迷惑をかけます。つまり、密出国に成功しても失敗しても、どちらに転んでも家族の運命は大きく変わります。

それを十分意識していた新島はアメリカに着いてから、父親に宛てた手紙でこう謝罪しています。こんな「大胆な児」（原文は「大胆の児」）を持ったことを「御身の不幸」と受け止め、今後の数年間、「小子は無きもの」と諦めてほしい、と（③二八）。祖父はそれなりの覚悟を持って新島を送り出しましたが、さて、父親の反応はいかばかりであったでしょうか。

私のルビコン川

新島のケースとはもとより比較にはなりませんが、私にもミニ・ルビコン体験があります。

21歳の時、私は新島が創設し、初代牧師を務めた同志社教会で洗礼を受けました。信仰を人生の最期まで貫徹できる自信や確信はなかったのですが、さりとて、ルビコンを渡るほどの切迫感や危機感もさほど感じませんでした。

その時よりはるかに身に迫るルビコン川直面経験は、新島よりもうんと歳を食ってからで、アラフォー時代のことです。

それ以前、同志社の大学院を出た時には大学教員になる道が塞がれていましたので、方向転換をしてある高校（京都からははるかに遠い地の）に就職しました。けれども18年後、諸種の事

情から（周りから見れば）唐突に職を辞して、京都に戻る決断を下しました。

新島同様に、前途（私の場合は再就職）の見込みはまるでありませんでした。だから、まさに大博打です。思い切って、賽を振ったことになります。最大の動機は、今風に言えば新島襄の「推し活」がしたくて同志社に戻り、新島の研究を本格的に行ないたかったからです。そのためには、行く行くは大学教員になりたいという夢が、転身（転職）の支えでした。

新島の単身密出国のケースとは違って、私の場合はすでに家族持ちでしたから、妻子には相当な不安を与え、迷惑もかけました。ボストンに入港できたものの、前途の見込みがまるで見通せなかった時の新島の不安、「まるで気がふれた人」（⑩17）になったとの発言が、私なりに共感できたのも、この不安定期の副産物でした。

捨てる神あれば、拾う神あり

京都ではアルバイト講師の仕事をいくつも抱えて生計を支えました。ささやかな退職金は住宅ローンの一括返済で消えましたので、心細かったです。定職のない間、就活の手助けや生活支援の面などで、何人もの人から救いの手が差し伸べられて、感激しました。

その結果、函館からの密出国を義侠的に助けてくれた友人たちの恩義に対して、新島が述べた言葉が身に沁みました。「骨二徹し忘るへからす」です（⑤三八）。

がむしゃらにバイトする合間を縫って、研究生活にも励みました。そうこうするうちに、実績（いわゆる業績）がしだいに認められるようになり、同志社大学から念願の働きの場が与えられました。最初に採用されたのは同志社社史資料室（現センター）の職員、ただし嘱託（非正規雇用）です。すなわち、当初は非常勤（アルバイトです）でしたが、最後は常勤になれました。常勤嘱託とはいえ、ここに至るまでには十年余を要しました。

ついで、それから数年後、やっと正規の大学スタッフ（神学部教員）になれました。それもいきなりの大学院教授です。野球部で言えば、それまで球拾いばかりの部員がいきなり一軍、それもスタメン選手（９番ライトでしたが）に抜擢されたようなものです。

正規雇用になった時、歳はすでに60歳を越えていました。同志社中高時代の同級生の多くは、定年後の人生設計に腐心している立場にありました。

「神の摂理」と「少年の狂気」

信仰的に言ってしまえば、私の無謀な冒険は、「神の摂理」に守られたことになりますが、それが確信できたのは、やはり定職を得てからでした。

この点は、新島も同じではなかったかと思いたくなります。彼は、ルビコン川を渡って函館から国を抜け出る冒険に関し、「ひたすら運を神の御手にゆだねた」といった模範解答を用意しています（⑩一六）。が、これはリアルタイムの正直な想いではなく、ひとまず危機を突破した渡米後の記述であることを考慮すべきです。

彼にとっては信徒になるまでの気持ちは、行きあたりばったり、といった無鉄砲さが真相じゃなかったでしょうか。その証拠に、出国まもなくは「少年之（の）狂気」（③二一、二三）のなせる業、と繰り返し告白していますから。ならば、脱国決行は分別に欠けた子ども並みの直情径行的な暴発行為にほかなりません。

同様に、密出国してから渡米に至るまでの１年余の間、「私の勇気をもちこたえさせてくれたのは、見えない御手が必ずや私を導いて下さるという考えだった。」との回想（⑩四五）も、信仰的に整理されてからの記述と見るべきでしょうね。

リアルタイムで見れば、新島とて密出国の渦中では心が大きく揺れることが幾度もあったはずです。

21歳からの出発

そして、結論です。今週は同志社スピリット・ウィークですから、スピリットで話を締めてみます。同志社のスピリットは、新島スピリットから始まっています。それは、新島がモットーとした「自由教育、自治教会、両者併行、国家万歳（④二四六、二五四）」を目指す志にほかなりません。

そうした理想に向かって彼が第一歩を踏み出したのが、函館です。そして、そこに到る最終の関門、あるいはハードルこそ風間浦でした。

さらに、それ以前の助走にまで遡ると、玉島航海です。いずれも今の大学生と同じ世代の時に新島が経験し、あえて挑戦した出来事です。

皆さんも新島に倣って、生涯を一貫するような志を立て、それに向かって雄々しく「出発」（出航）していただきたいと思います。志が高ければ高いほど、ゴールに至る関門やハードルも高いはずです。時には越えてはいけないルビコン川をあえて越えなければ、目標に到達できないケースもあろうかと思います。

「行け、行け、心安らかに。強くあれ！」

そうした局面や困難に直面した時には、かつての新島が勇気を振るってルビコン川を越えた体験に想いを馳せてください。

夢や志、意欲や使命感に基づく新島の原動力や行動に自分を重ねて、前進する勇気をもらってください。

新島が校長として卒業式で同志社の学生たちに送ったエールをふたつ紹介します。ひとつは第一回卒業式での校長式辞の末尾の言葉です（『同志社百年史』通史編一　１１１頁）。“Go, go, go in peace. Be strong! Mysterious Hand guide you!”　これは寒梅館ハーディーホールの内壁にも飾られていますが、文言が多少異なっていますので、学内で混乱が生じています。

今ひとつは「進メ進メ好男児、決シテ退歩ノ策ヲ為ス勿レ」（③四六八）です。

新島はこうした言葉を発する時には、若い頃に函館で試みた蛮勇を思い起こしていたかもしれないですね。ひょっとすると、津軽海峡を前にした時の自分を奮い起こすための自己エールだったのかもしれません。

いずれにせよ、さらにいっそう追い込まれて切羽詰まった場合には、風間浦の現場にわが身を置くような気分になって、新島の立志と挑戦を追体験してみるのも、有効かもしれませんね。

同志社に学んだからには、他校にはない新島スピリットをぜひとも身に帯びて世に出て行ってください。そのためには在学中に、局面を打開するための突破力や原動力をできるだけ身に着けておかれるように、と自戒をこめて切に願います。

２０２２年11月10日　同志社スピリット・ウィーク秋学期
京田辺校地　「講演」記録